

平成10年度～平成13年度科学研究費  
(基盤研究C-2)研究成果報告書

「喉音三行弁」の觀念の成立と日本音韻学  
の自立化過程に関する学説史的研究

課題番号：10610408

平成14年2月

研究代表者

釘貫 亨 (名古屋大学大学院文学研究科)

研究者番号：50153268

は し が き

本書は、平成10年度から平成13年度までの4年間に交付された文部科学省科学研究費補助金基盤研究C-2「『喉音三行弁』の觀念の成立と日本音韻学の成立に関する学説史的研究」における研究成果の報告である。本研究は単独で行われた。研究代表者は、

釘貫 亨（名古屋大学大学院文学研究科）である。配分類の内訳は次表のとおりである。

交付決定額（配分類）	（金額単位：千円）		
	直接経費	間接経費	合計
平成10年度	1 2 0 0	0	1 2 0 0
平成11年度	9 0 0	0	9 0 0
平成12年度	5 0 0	0	5 0 0
平成13年度	5 0 0	0	5 0 0
総計	3 1 0 0		3 1 0 0

本研究にかかると研究発表は以下のとおりである。

① 論文

釘貫 亨 「日本語史の可能性と『国語史』」  
『国語学』196集（国語学会、1999）

釘貫 亨 「日本語学史における『音声』の発見」  
『名古屋大学文学部研究論集』（2001、3）

釘 貫 亨 「古代人のこゑ（声）を聞く」『美夫君志』第63号（美夫君志会、2001、9）

釘 貫 亨 「『呵刈葎』論争における上田秋成の依拠学説 - 福波今道『喉音用字考をめぐって』 - 」『国語学』53巻4号（国語学会、2002、4）

② 口頭発表

釘 貫 亨 「古代人のこゑ（声）を聞く」美夫君志会平成13年度全国大会（2001、6・30 中京大学）

釘 貫 亨 「『呵刈葎』論争における上田秋成の依拠学説 - 福波今道『喉音用字考』をめぐって - 」国語学会平成13年度秋季大会（2001、10・21 福井大学）

以上

1 はじめに

われわれ日本語学者は、奈良時代の万葉仮名と当時の漢語字音との関係を近代音声学の手法によって分析のメスを入れるとき、当代の発音をある確実性を伴って復元出来ることを教えられている。上田万年「P音考」で明らかになされた古代語ハ行子音の実態や橋本進吉が解明した奈良時代語八母音の発見、さらには有坂秀世による精密な古代語音の推定などもかかる精密な観察によって明らかにされた。それらは、近代言語学の歴史的手法の国語研究への導入がもたらした勝利の典型とし

て語られてきたのであった。

このような評価自体は誤りを含んでいるわけではないが、ある重要な事柄が強調されていない。すなわち古代語の音声復元の作業は、既に近世の国学者によって顕著に高度な水準にまで達しており、その成果のうえに近代国語史学の勝利がもたらされたのであるという点である。本報告は、古代語音声の復元に際して国学者達が共有した熱情とその業績の再現を通じて、言語研究史における音声への知的自覚の持つ意義を確認しようとする。

## 2 日本における音声言語研究はいつから始まったのか

わが国における言語音声を対象とした学術の始まりは、まとまったものとして弘法大師空海が平安時代初期に唐から持ち帰った真言密教教学の悉曇学であるとされる。いうまでもなく真言は、大日如来の「ことば」であり、そのための教学は神秘化された「ことば」としてのみ対象化されるのであって、人間の日常的な営みとしての音声言語という視点は存在しない。したがってここに日本語音声の観念が介入する余地はない。空海が将来した悉曇学を中心は、やがて天台密教に移行し、安然『悉曇藏』という古代的達成を経て、平安時代末に明覚が子音軸と母音軸を縦横に並べた音図（『反音作法』）を開発した。（図1）音図の出現は、音素文字を持たない日本人が

音節を子音と母音に事実上分離するに至ったことを示すものである。以後、五音図は中世悉曇学の基本概念として方法化されてゆく。

院政時代には高野山に東禅院心蓮（一一八一没）が現れて真言悉曇学が優勢を取り戻し、『悉曇相伝』（図2）に見るような精細な音声学的観察によって大きく進展する。

図 1

ア イ ウ エ オ    カ ク ケ コ  
 ヤ イ ヲ エ コ    サ シ ス セ ソ  
 タ チ ツ テ ト    ナ ニ ヌ ノ  
 ラ リ ル シ ロ    ハ ヒ フ ヘ ヤ  
 コ ニ ム メ モ    オ オ ヲ カ シ  
 初、ア、イ、ウ、エ、オ、五字者は皆子音ノ韻類也  
 ア字、カヤナキ、ヒ、ナリ、イ字、ハ、イ、シ  
 善ノ韻也、オ字、ハ、コ、ソ、等ノ韻也、女人多不  
 知此五韻字及音多深矣、如此之利者  
 可解、今方始者、奉之者、東家有德  
 紅、又、德字、トク者、紅字、ハ、音也、德字、初  
 修、紅字、終者、相合、等、之、成、ト、音、也、手、上

図 2

五音  
 ア イ ウ エ オ  
 カ ク ケ コ  
 サ シ ス セ ソ  
 ナ ニ ヌ ノ  
 ハ ヒ フ ヘ ヤ  
 オ オ ヲ カ シ  
 コ ニ ム メ モ

このころ、日宋貿易を通じて『韻鏡』が輸入された。『韻鏡』は、唐末頃に成立した四十三枚からなる漢字音図であり、唐代字音をモデルにしていると考えられている。この書物の具体的な用途ははっきりしないが、詩作の際の押韻字検索に便利であったかもしれない。要するに『韻鏡』は、仏教教学と無関係

な純然たる世俗の書物であったが、わが国では音声分析のノウハウをもった悉曇学者を措いて理解者がいなかった。わが国で始めて『韻鏡』を読解した人物として知られるのが悉曇学侶明了房信範である。信範を宗匠とする『韻鏡』伝授が密教教学内で継承されるが、この書物が世俗の知識世界に流出するのは近世以後のことである。

中世の言語音研究として逸することが出来なないのは鎌倉時代に天台教学内で興隆した法華經字音学の存在である。読經という行為そのものは仏教伝来以来存在したのであろうが読誦音自体を学問の対象にしたのは、天台学侶心空に始まる<sup>註1</sup>。なぜこのとき、法華經字音学が興起したのか。考えられる要因として、平安時代後期から流行した芸能としての「読經道」の存在がある。「読經道」の中心地播州書写山円教寺では、後白河法皇をパトロンとして以来「読經道」が隆盛を極めたという<sup>註2</sup>。書写山にも住した心空は、このような雰囲気を肌身で経験したはずで、天台法華經教学はかつてないほど經文読誦の音声に関して関心を強めていたのである。

以上のように中世以前のわが国において言語音声に対する知的関心が存在しなかったわけではない。しかし、これらの業績は、今日の日本語学における音声研究の直接の源流とみなすことが出来ない。なぜなら悉曇学であれ法華經字音学であれ、これらは仏教という神秘的な環境の枠内で始めて自覚化された事

柄を対象にする学問だからであって、宗教の  
世界から離れた日常的な言語音声に関心があ  
るわけではない。実際、悉曇学も法華経字音  
学もそれ自体としては、この後如何なる学統  
にも自己展開することがなかつたのである。  
それでは、今日の日本語音声研究の直接の源  
流をどこに求めればよいのか。その問題を次  
節で明らかにしたい。

### 3 すべては仮名遣いから始まった

中世の日本語研究は、平安王朝の仮名文学  
作品の注釈として行われた。その技術的支柱  
をなすものが仮名遣いとてをば学である。こ  
れらが中世に発足した理由の一つは、平安  
時代から鎌倉時代にかけて大きな言語変化が  
起こったからである。仮名遣いは、十一世紀  
以来生起した日本語の歴史的音変化の結果、  
生起したわが国独自の正書法である。十世紀  
に完成したといわれる平仮名による書記体系  
の存在を窺わせるものとして、いろは歌があ  
る。この人口に膾炙した日本式アルファベツ  
トによつて王朝宮廷人は、いろは四十七種  
音に正しく対応する平仮名を駆使して、すべ  
ての日本語が仮名文字に転写され得る事を体  
験したはずである。

しかし、ハ行転呼音（語中語尾のハヒフヘ  
ホがワヰウエヲの音に推移する現象）とアワ  
行のいゝゐw i、えeゑw e、おoをw oの  
合流と云う大規模な音変化によつて、いろは

歌が表現する音と文字の整合な対応が十一世紀以後崩れ始めた。その結果、人々は自らの発音をもとにしては平安時代と同質の歌文を綴るこたが出来なくなつたのである。平仮名で表現される和歌と散文文芸のテキストを自由かつ正確に復元出来ないことは中世宮廷人の教養の体得にとって深刻な課題となつた。かくして、平仮名正書法としての仮名遣いが中世古典研究の発足とともに登場する。

日本古典学の創始者藤原定家（一二四一没）の仮名遣い書『下官集』における古典書写の際しての基準は、全体として平安時代の古書によりながら「お」と「を」の書き分けについて鎌倉時代当時の京都アクセントに依拠したと考えられている<sup>註3</sup>。かかる二重基準は、元來定家個人のためのものであつたその当事者なら十分使いこなせたであらうが、時代が隔たるにつれて次第に合理的な説明が困難なるのは必然である。

鎌倉時代末期に行阿という古典学者が自著『仮名文字遣』で「定家卿仮名遣」を標榜してマニユアル化して以來、不動の規範として社会的な固定を見たといわれている。この後、さらに室町時代に大規模なアクセント変化を経た京都語圏で定家仮名遣いを説教する歌学の宗匠らがその存在根拠を合理的に説明することは不可能であつた。また仮名遣いが合理的な説明を拒む純粹規範であるがゆえに、定家の権威を唯一の動力源にしつつ秘伝奥伝の神秘的な学術環境を生き残つたのである。中世



の古典正書法の規範であった仮名遣いは、平安時代以来の音変化の結果もたらされたのであったが、これを実践する中世人にとってこのような観念は、むしろ存在しなかった。仮名遣いの問題の根源に音変化の問題が存在することを自覚するのは、近世の国学者である。

中世以来の堂上歌学を背景とする定家仮名遣いと契沖以後の近世仮名遣いには、問題の立て方に根本的な相違が存在する。すなわち前者が古典文学の書写と歌文制作をめぐる書記規範であるのに対して、後者は、仮名遣いとはそもそも何かという学理的規定に精力が注がれた。契沖『和字正濫鈔』（元禄8年1695刊）は、万葉集注釈によって鍛えられた上代古典の教養に基づく古代仮名の用法に関する詳細なレポートであった。この実証的な報告は、事実上定家仮名遣いの純粹規範の恣意的な本質を告発するものであった。合理的説明を拒絶することで成立していた伝統的正書法に対して、契沖は復古主義に基づく文献考証によって、仮名遣いに学理的根拠を与えようとしたのである。

契沖（1701没）は、書記規範を説明する枠組みとして伝統的に用いられてきたいろは歌に替えて、古代語音声を網羅した（と彼が考えた）五十音図を対置した。ちなみに「五十音図」とは契沖が『和字正濫鈔』で名付けた呼称である<sup>※4</sup>。音図には当時、「五音の図」「直音拗音図」「五音五位之次第」などさまざまな名称があつて、契沖にいたって始めて

古代日本語音を過不足なく網羅した合理的な配置図としての位置が与えられた。「五十音図」の名称には、古代国語音の過不足ない配当図としての意味がこめられている。(図3)

図 3

波は	奈な	太た	和わ	良ら	也や	末ま	左さ	加か	安あ	喉音 兼 韻 一 体 兼 音 類 未 詳
波は 波以切	奈な 奈以切	太た 太以切	和わ 和以切	良ら 良以切	也や 也以切	末ま 末以切	左さ 左以切	加か 加以切	安あ 安以切	喉音 兼 韻 非 聲 兼 音 類 未 詳
波は 波字切	奈な 奈字切	太た 太字切	和わ 和字切	良ら 良字切	也や 也字切	末ま 末字切	左さ 左字切	加か 加字切	安あ 安字切	喉音 兼 韻 非 聲 兼 音 類 未 詳
波は 波注切	奈な 奈注切	太た 太注切	和わ 和注切	良ら 良注切	也や 也注切	末ま 末注切	左さ 左注切	加か 加注切	安あ 安注切	喉音 兼 韻 非 聲 兼 音 類 未 詳
波は 波遠切	奈な 奈遠切	太た 太遠切	和わ 和遠切	良ら 良遠切	也や 也遠切	末ま 末遠切	左さ 左遠切	加か 加遠切	安あ 安遠切	喉音 兼 韻 非 聲 兼 音 類 未 詳
唇内 兼 字所生	舌末 兼 以所生	舌中 兼 以所生	喉 兼 唇 兼 口 兼 中 兼 所生	舌 兼 口 兼 以所生	舌 兼 口 兼 以所生	喉 兼 外 兼 牙 兼 以所生	舌 兼 本 兼 以所生	喉 兼 外 兼 以所生	喉 兼 以所生	初一行注す

五十音  
縦各行五音相通  
横各行同韻相通

仮名遣いを解明する枠組みをいろは歌から五十音図に変えたことは、極めて画期的な試みであった。伝統的な仮名遣いにおいては「いろはのい」と「うゐのおくやまのゐ」などと説明されていたことが、「ア行のい」、「ワ行のゐ」という図上の位置付けによる説明に切り替わった。その結果、仮名遣いを生起した本質的実情が上代に存在した発音問題であることが明らかになった。仮名遣いで問題となる文字「いゐひ」、「えゑへ」、「おをほ」を音図上に置けば、そこに一定の規則性のあ

ること一目瞭然たるものがある。仮名遣いと  
は定家仮名遣いによって伝えられてきたよう  
な正書法上の純粹規範ではなく、古代国語の  
発音問題であつたのである。近世仮名遣い論  
は、いろは歌から五十音図に説明の枠組みが  
スイッチすることによって、正書法から古代  
音声の問題として位置付けられた。近世の仮  
名遣いは、単なる書記規範ではなく、古代語  
音声の独自の仕組みに切り込んでゆく本質論  
に生まれ変わった。

契沖は、自らが提案した仮名遣いの要諦が  
近世人の想像を超えた古代語のアワヤ行の発  
音の区別の問題であることを認識していた。  
これを「喉音三行弁」あるいは「喉音仮名三  
異弁」という。しかし、その発音の区別が如  
何なる実態を持ったものであるのかという音  
価推定には契沖の慧眼を以つてしても至らな  
かつた。近世の仮名遣い論は、この「喉音三  
行弁」の音韻学的定義をめぐって展開するが、  
その困難な課題に挑み古代音声の復元に成功  
したのが本居宣長（1801没）であつた<sup>36</sup>。

#### 4 音声言語研究と近世の仮名遣い論

近世の仮名遣い論が学理的本質規定である  
所以は、仮名遣いという伝統的書記規範の背  
後に古代日本語の独自の音声の仕組みが存し  
たという認識を軸に学説が展開したからであ  
る。中世の「仮名遣い」に対して、近世は「仮  
名遣いの論」が立ち上がったのである。近世

仮名遣い論においてかかる音声学的認識が成立した要因として、この時期音図が世俗の知識世界に流布したことがあげられる。五十音は、元来日本語音を写したのではなく、平安時代はじめ、悉曇学において梵音梵字の配当（悉曇草）の仮名音訳として高野山で生まれたものであるという<sup>註6</sup>。悉曇学では母音（摩多）をほほアイウエオ順、音節（体文）をカサタナハマヤラワの順で排列するので、五音はこれに倣ったのである。

このように五音はもともと図ではなく線條表示であって、今日に見るような母音子音を整合的に排列した「音図」としての体裁が整うのは天台密教の明覚『反音作法』（寛治7年1093）以来のことである。本書が提示した音図の行順はアカヤサタナラハマワというものであるが、これは中世悉曇学の調音上行の分類であるアカヤ行（喉音）、サタラナ行（舌音）、ハマワ行（唇音）の「三内説」に従ったものであることは疑いない。このように五音が図示の対象になったのは漢字反切の手順を利便に行うためであったといわれる。三内説による調音分類は、さらに高野山の東禅院心蓮の精密な調音注記を得て中世悉曇学の模範として伝承されてゆく<sup>註7</sup>。

中世悉曇学の展開に関連して今ひとつの重要な画期をなす出来事があった。それは日宋貿易を通じて『韻鏡』が輸入されたことに伴う韻鏡注釈の開始である。『韻鏡』は、唐末頃に制作された漢字音検索のための音図集で

唐代の標準音をモデルにしたものと一応想定される。(図4)『韻鏡』をわが国で最初に理解した人として記憶されるのは『韻鏡』注釈の祖と仰がれる悉曇学者明了房信範である。世俗の実用書であった『韻鏡』は、かの地では実用に供さなくなつた時点で捨てられたためか今日に伝わらない。一方、わが国では本書は輸入以来古典籍としての扱いを受け、韻鏡注釈が始まる。『韻鏡』は、流布本の序例を執筆した南宋張麟之以来、本書が伝統的な漢字音規定の手法である反切を図解したものと「誤解」されたので、わが国でも当然この認識が踏襲された。明覚『反音作法』によって図示された伝統的な五音図もまた反切法の道具として利用され、その結果中世のあつた頃から韻鏡注釈書に五音図が掲載されるようになった。(図5)

図 4

	齒音	舌音	音	喉音	齒音	次	清	濁
	清濁	清濁	清濁	清濁	濁	濁	濁	濁
東	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
董	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
送	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
屋	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○

図 5

フ	テ	ヤ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	其音故見折や他皆倣效 直音拗音圖
フ	テ	ヤ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	
イ	リ	井	三	レ	千	ニ	キ	イ	
イ	リ	井	三	レ	千	ニ	キ	イ	
エ	レ	エ	メ	ハ	子	テ	セ	ケ	
エ	レ	エ	メ	ハ	子	テ	セ	ケ	
キ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	
キ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	
唯音	舌音	喉音	舌音	唇音	舌音	舌音	齒音	喉音	

『韻鏡』と五音図が世俗の関心を集めるき  
っかけになつたのは、室町時代に公家の間  
年号や人名の吉凶の占いは、例えれば康治  
ことに占うのに康治の反切は飢となるか  
吉凶である、とすようなものである。この  
吉な独特の姓名判断を「名乗反切」或いは  
うな反切」と言う。これがかなり流行した  
名反切の公家の日記などに見える<sup>註</sup>。占  
が当時の公家として、できただけ込み  
書物の常と好まれるから『韻鏡』とそ  
なものは、このよ様な需要によく適合  
は、『韻鏡』を人名反切に見越した出版  
同書に對する需要を出版した。毛利貞  
盛んに韻鏡注釈書を出版した。京世  
上松斎、小亀益英ら等は自らの学問  
注釈書を執筆し、彼等は自らの学問  
「音韻之学」と称した。この魔術性  
音韻之学を契沖は軽蔑してはなかつた。  
世俗化は悪いことばかりでなかつた。  
以来の韻鏡注釈書に付載されてきた音  
韻之学の流行とも世俗の知識世界に  
したからである。それまで五音や音  
は、密教の教内では知られた存在に  
た。近世の韻鏡注釈に掲載された「五  
之次第」や「直音拗音図」は、日本語

る認識の反映ではなく、反切によって漢字音を規定するための理論的補助図であった。

漢字音再構成のためのこのような理論図を古代語音の反映図に読み替えて、仮名遣いを解明する枠組みとしたのが契沖の「五十音図」であった。

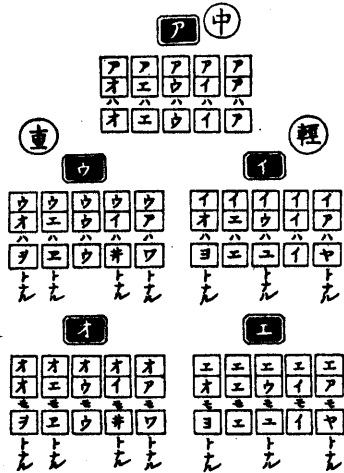
契沖による仮名遣い論のいろは歌から五十音図への枠組みの転換は、書記規範から古代日本語音の復元という学理的課題へ観点を移行させる決定的な要因をなした。契沖は、古代国語のアワヤ行の発音の区別の中に仮名遣いの本質が隠されていることを最初に了解した。仮名遣いの背後に近代人の想像を超えた古代語音声のユニークな仕組みが存在する、という認識こそ近世仮名遣い論の中核的動機である。

アワヤ三行の万葉仮名に用いられる漢字は、『韻鏡』の調音分類では「喉音」に属する。仮名遣いの要諦を古代語のアワヤ行の発音の違いに注目した契沖の観点は、本居宣長に引き継がれ、『字音仮字用格』（安永5年1776刊）において「喉音三行弁」という術語を与えられた。宣長は、契沖の仕事を一歩進めて奈良時代に用いられた万葉仮名の観察から、「喉音三行弁」の発音の実態を浮かび上がらせることに成功した。宣長はこれらの音声の関係を「喉音三行分生図」「喉音軽重等第図」という二枚の図で表している。（次頁図6）すなわち、喉音三行とりわけア行とワ行においてイヰ、エエの字音仮名は、唇の開き

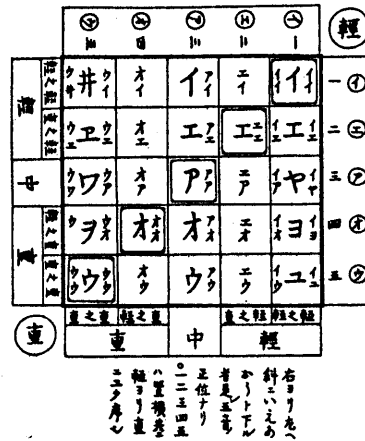
の程度を表す『韻鏡』の「開合」の所屬の違いによって説明されるが、ひとりオヲの仮名についてはともに合音に属しており、一律の説明が出来なかった。

図 6

圖生分行三音喉



圖第等重輕音喉



アワヤ行の発音の区別は、五十音図の秩序に沿った規則的な差異によって維持されていた筈だと考えた宣長は、「喉音三行弁」から『韻鏡』の範疇にはない融通無碍な「軽重」の概念を用いてオヲの区別を説明した。これが結果的に功を奏し、上代のア行の発音は、a・i・u・e・o、ワ行のそれはw a・w i・u・w e・w o、ヤ行はj a・j i・j u・j e・j oと復元された。これが一見複雑なこの二枚の図の意味するところである。

このように喉音三行の音声は、体系的な差異として維持されていたことが宣長の音価推定によって明らかになった。その結果、当時の音図の仮名配列に関する重大な修正が行われた。当時流布していた音図のア行とワ行の



仮名はアイウエヲ、ワヰウエオとなっていて、オとヲとが入れ替っていた。これは本来は、アイウエオ、ワヰウエヲの配置であって十一世紀以後オとヲの音統合が生じて混乱したのに加え、中世悉曇学の宗匠東禅院心蓮の音図が「アイウエヲ、ワヰウエオ」と配置したのに倣って長らくオヲの配置の錯誤が続いた。古代語の発音を復元した宣長によれば、ワ行に配置されていたオは万葉仮名の於類に、ア行に配置されていたヲは遠類に遡るから、中世以来のア行とワ行の仮名の配置は古代語の音秩序に外れたものと認識された。オをア行仮名、ヲをワ行仮名とすれば古代語の「たわわ（撓）ーとをを」「あたご（愛宕）ーおたぎ」などの音相通もよく説明することが出来る。そこでついに古来の正常な音図の配置を復元し得たのである（『字音仮字用格』「於乎所属弁」）。宣長は、古代語音声の復元を通じて伝統的音韻学の縛りを突破し、中世音図のオヲの配置の錯誤を見抜いたのである。その際、宣長は神懸った行き方ではなく、実証と合理的推論の結果として「古代人の声を聞いた」のである。科学的実証と合理的推論の結果、「奈良人の声」を聞いた宣長の感激をわれわれは想起すべきであろう。

このように中世以来の仮名遣いが近世において古代音声学にまで展開したのは、仮名遣いの説明に、いろは歌を捨てて五十音図を採用したことによる。これによって、元来書記規範であった仮名遣いの本質に音声的な事情

が介在していることを容易に想起し得るようになつた。古代語解釈の道具としての五十音図の説明力は、ひとり音声学にとどまらず、動詞活用論に及んだ。動詞活用の体系を五十音図によつて説明することは、本居春庭『詞八衢』（文化5年1808刊）が知られるが（図7）、発想そのものは本居宣長『御国詞活用抄』（天明2年1782頃成立）を以つて嚆矢とする。このことは、宣長が五十音図を単に仮名遣いにとどまらない古代日本語に普遍的な説明原理として捉えていたことを示すものである。五十音図は、音声と文法にわたる古代語復元の技術として抜群の説明力を発揮したのである。

図 7

活の段 下二段		活の段 上二段	
数	音	数	音
1	あ	1	ん
2	い	2	は
3	え	3	ひ
4	お	4	ふ
5	か	5	ま
6	き	6	や
7	く	7	ゆ
8	こ	8	よ
9	さ	9	ら
10	し	10	る
11	す	11	わ
12	せ	12	ゐ
13	そ	13	を
14	た	14	ゑ
15	ち	15	を
16	つ	16	ゐ
17	て	17	を
18	な	18	ゐ
19	に	19	を
20	ぬ	20	ゐ
21	ね	21	を
22	の	22	ゐ
23	ほ	23	を
24	へ	24	ゐ
25	ふ	25	を
26	ぶ	26	ゐ
27	ふ	27	を
28	ぶ	28	ゐ
29	ふ	29	を
30	ぶ	30	ゐ
31	ふ	31	を
32	ぶ	32	ゐ
33	ふ	33	を
34	ぶ	34	ゐ
35	ふ	35	を
36	ぶ	36	ゐ
37	ふ	37	を
38	ぶ	38	ゐ
39	ふ	39	を
40	ぶ	40	ゐ
41	ふ	41	を
42	ぶ	42	ゐ
43	ふ	43	を
44	ぶ	44	ゐ
45	ふ	45	を
46	ぶ	46	ゐ
47	ふ	47	を
48	ぶ	48	ゐ
49	ふ	49	を
50	ぶ	50	ゐ

5 音声学の誕生と民族主義

留意しておかなければならないのは、仮名遣いという正書法から展開して古代国語の発

音の復元という近世的展開を實現した精神的  
動力源は、国学運動を支えた民族主義的情熱  
であつたといふ点である。近世日本音声学の  
祖といふべき人物が契沖であつたことは既に  
述べた。古典学者契沖の主要業績は、いうま  
でもなく万葉集の注釈であるが、彼の注釈は  
中世の万葉学とは本質的に異なつていた。契  
沖にとつての万葉集は、古今集理解の補完物  
ではなく、それから自立し、かつ優位に立つ  
古典テキストとして位置付けられた。堂上歌  
学から陰に陽に疎外された契沖は、都会的洗  
練の極致であり伝統的支配層によつて閉鎖さ  
れていた「王朝のみやび」を超える古典学の  
目標を模索した。そこで得られたテキストはこ  
そ万葉集であり、王朝テキストに範を置く定  
家仮名遣いに対して上代の用字法を規範軸に  
据えたのである。そこに至るプロセスも口伝  
奥伝の怪しげな秘術によつてではなく、文献  
考証に基づく証拠物件を突きつけて伝統的仮  
名遣いの非合理を告発したのである。契沖に  
とつて万葉集をはじめとする上代文献が発す  
る精神的価値は、「王朝のみやび」という都  
市的洗練に替わつて、民衆の野性を含んだ「や  
まところ」といふ民族精神の発露であつた。  
かかる精神的目標は、近世期の古典研究が持  
つ大衆性と広域性に適合した。

近世国学者にとつて古代人の発音の復元の  
問題は、民族主義イデオロギーが等しく持つ  
肉体への傾倒と密接に関わつてゐるが、民族  
主義的信念に貫かれた言語学者の例をわれわ



祖語から古代ゲルマン語が分離した徴証である  
る第一次子音推移、さらに紀元後六世紀頃に  
ゲルマン語から古高地ドイツ語が分離する  
っかけとなつた第二次子音推移を論証した。  
これらの規則的な音声推移は発見者になん  
でグリムの法則と呼ばれるが、ここに至つて  
比較言語学は飛躍的な精度を獲得したと言  
れる<sup>註9</sup>。従来と比較文法による「音」の比較  
が実際は綴り字を対象にした素朴な比較にと  
どまっていたのに対して、グリムは音声学の  
リアリズムを比較言語学の古音復元に注入し  
たのである。グリムの法則を報告した『ドイ  
ツ文法』第二版(1822)において民族主義  
者ヤーコブは、宣長の経験と似てチュート  
ンの森から立ち現れた「古代ゲルマン人の声  
を聞いた」に違いない。以後、比較言語学の  
発展はドイツの独壇場の様相を呈するに至  
り、全盛期を迎えるが、「音法則に例外なし」  
の科学信仰を豪語したドイツ青年文法学派に  
とつてヤーコブ・グリムは、民族精神と不可  
分の近代科学の祖としての榮譽を担いつづけ  
るのである。グリム兄弟の古学と宣長の古学  
の間に類似の役割が存在することに注目した  
のは谷省吾であつた<sup>註10</sup>。その論を受けて筆  
者は、その役割の最も精妙な類似を宣長とヤ  
ーコブ・グリムの古代語音声学に見出して論  
じた<sup>註11</sup>。本居宣長による古代語音声学の興  
隆は、一般言語学的観点からすれば、ヤーコ  
ブ・グリムによつて見出されたグリムの法則  
と類同の、しかも彼よりも先行する近代音

学の誕生として記述され得る。洋の東西に相  
次いで興起した音声学は、ともに民族主義的  
情熱によつて支えられたところが極めて興味深い。  
とししかしな発がら、西洋の音声学のそれが比較言  
語学的方法の一層の深化と実学的なイギリス  
音声学を生んで更なる展開を示したの対し  
て、日本音声学は東条義門、奥村栄実といっ  
た優秀な後継者を生む一方、五十音図を神  
秘化した音義言霊派の跳梁といふ退廃的プロ  
セスを著し、文献実証主義と民族主義的排外  
音声学という異質な二つの熱情を一人格の内  
に置いて互いに掛け替えの無い活力源とし合  
う関係を維持したのである。「喉音三行弁」  
によつて古代国語音の復元に成功した宣長  
は、『字音仮字用格』上梓の九年後、『漢字  
三音考』（天明5年1785）を刊行した。  
この書物は、わが国における最初の漢字音研  
究書であるというよりもむしろ音言語に関  
する一種のイデオロギーの表明とも言べき  
ものであつて、後にさまざまの問題を引  
き起した書物である。手堅い文献考証と合  
理的推論の力で古代国語音に近づき得て、  
自説の民族主義は互いに掛け替えの無い活  
力源と信じてあつた。「科学的〇〇主義」が  
標榜する信念の強固さをわれわれはよく知  
っているが、宣長のよな「科学的民族主義」  
の信念に憑かれた人を改心させるのは容  
易な技ではない。

果たして宣長の音声学は、民族的排外主義の姿を明確に露呈してきた。

『漢字三音考』では、上代日本語の発音が外国語音の混雑不正に比べて単直純正であること、ンの音や半濁音（p音）が上代語に存在しないという主張が展開されるが、これはやがて上田秋成を刺激して有名な『呵刈菴』論争を導いてゆくことになる。この論争の今日的評価については稿を改めざるを得ないが、民族主義的信念を自らの古代語研究の成果によって武装する宣長のスタンスは極めて強固なものであった。17世紀から18世紀にかけて、日本語研究は勿論、西洋言語学においても一般言語学的観点は方法論として確立しておらず、言語、とりわけ音声は、民族の血肉として捉えられた。

石川啄木の短歌「ふるさとの<sup>なま</sup>訛なまなつかし  
／<sup>てい</sup>車場ていの人ごみの中に／それを聴きにゆく」  
（『一握の砂』）にあるように、われわれは自分の属する言語共同体の音声を他郷で耳にするとき、決して心中穏やかではいられない。東北地方のズーズー弁を典型として方言コンプレックスの中心をなす要因が音声に関わることを見てもこの点は明らかである。

音声言語は、郷土意識や民族意識と直接つながる感情喚起力を常に伴っている。それは、自らの顔かたちに対する自意識にも似た肉体の記憶と響き合うところの何者かである。民族主義的音声学は、近代的自意識が興隆してきたある一時期、自らが属する言語共同体の

姿を、ある典型ともいうべき肉体のイメージを伴って映し出すところの精妙な鏡として登場したのである。

[ 注 ]

注 1 中澤信幸「心空の韻学」『愛文』36（愛媛大学法文学部国語国文学会、2000）

注 2 柴佳世乃「『読経道』と書写山一『法華経音曲相承血脈』の位相一」五味文彦編『芸能の中世』（吉川弘文館、2000）

注 3 大野晋「仮名遣の起源について」『国語と国文学』27、11（東京大学国文学会、1950）

注 4 馬淵和夫『五十音図の話』（大修館書店、1993）

注 5 拙稿「『喉音三行弁』と近世仮名遣い論の展開」『国語学』192（国語学会、1998）

注 6 馬淵和夫注4前掲書

注 7 拙稿「日本語学史における『音韻』の問題」『名古屋大学文学部研究論集・文学』43（1997、3）

注 8 注7拙稿

注 9 R・H・ロウビング『言語学史』第3版（中村完、後藤斉訳、研究社出版1993）高津春繁『比較言語学入門』（岩波文庫、1992）

注 10 谷省吾「グリム兄弟の古学」『鈴屋学会報』第7号（鈴屋学会、1990）

注 11 拙稿「日本語学史における『音声』の



発見」『名古屋大学文学部研究論集・文学』47（2001、3）

（名古屋大学大学院文学研究科教授）